

序 章 市史と民俗

第一節 歴史と民俗

歴史記述 の常識

裾野市史の一巻として資料編民俗が刊行されることとなった。この一冊は市史を構成する多くの巻の中なのかといふかられるのではないかと思う。特に歴史好きといわれるような歴史の本を読むことを楽しみにしてきた人達には、民俗編の一冊はとても歴史の本とは言えないという印象が強いのではないかと思われる。なぜならここにはほとんど何も固有名詞を持った人物、事件、そして年代が記述されていないからである。

私たちは歴史を小学校以来学校の教科として学んできた。それは原始・古代から始まって近現代まで時間の経過の中でどのような事件があり、その事件を通してどのように政治や経済の仕組みが変化したのかを明らかにしているし、その事件に関連した人物の名前を記して、その人物の役割とか目標としたことを説明している。いわゆる歴史上の人物が存在しない歴史は面白くないという印象を持っている人が多い。歴史の中の特定の人物の生きかたや人間関係に興味を持つ人も少なくない。研究成果としての歴史とNHKの大河ドラマとの区別をあまりせずに、同じように興味を持ち、同じようにそこに登場する人物に関心を寄せる人々が多いことは間違いない。

そのような事件本位、人物本位の歴史が明治以降の歴史の記述の中心であったが、それ自体の重要性は否定する必要はない。私たちは現代の日本の政治や経済の状況を見ても、政府や政党の中核にいる人物の行動、判断、そして思想が実際の制度の改革や変更に大きな影響を与えていることを経験的に知っている。現代は議会制度・選挙制度をは

じめ人口の多数を占める人々の判断とか意向が政治の動きを形成したり、左右したりすること、もしくは経験するところであるが、かつては支配者が自分の判断でものごとを決定し処理してきた。それだけに権力に関係する個人の存在は大きなものであった。歴史は個人の活躍で動いてきたかのような印象も与える。学校教育の中の日本史の授業で私たちは実に多くの人物の名前を知り、彼らが活躍した事件を覚えてきた。

固有名詞にこだ
わる地域の歴史

同様に、特定の地域の歴史でも、その地方の政治や経済の展開に大きな影響や役割を果たした人物は多数いるし、また地域の歴史を形成した多くの事件があった。裾野市史が資料編として刊行

した各巻にはそれらが残した資料が収録されている。そして、これから刊行される通史編の記述では市域で展開した事件とそれらにかかわって活躍した人々が歴史の流れとして記述される。事件と人物が豊富に登場するのが歴史である。これは一つの常識である。歴史は常に誰がどこでという問いに対応して記されてきた。そして歴史上の人物とか歴史上の事件という言葉があるように、特定の有力な人物や大きな事件が歴史を織りなしてきた。

そして、それに加えて歴史は年代を不可欠な要素にしているという常識がある。何時という問いは歴史の基礎である。市域で起こった事件は原則としてその起こった年月が示されるといふ常識がある。何時という問いは歴史の基礎であることを確認するのである。歴史は年代という時間の中で変化してきたことを全体的に把握して、一つの動向、一つの展開として理解することである。原始・古代に始まって、近代にいたるまで時間の経過を基準にして編成されるのが歴史である。古い時間は記述の前の方に出てきて、新しい記述は後ろの方に出てくる。

その時間の経過は刻々と変化する過程であるが、しかしある一定の時間は同じような政治制度が行われ、経済状況が見られる。その一つの共通した時間を時代と呼び、歴史は重視する。江戸時代とか明治時代という表現もそうで

るし、中世とか近世、あるいは近現代という区分もそうである。その時代は社会全体が共通した組み立てを示していたとされ、その時代の特質と時代から次の時代への変化を把握することが歴史研究の特色とされてきた。

日常生活の

それに比較すると、この一冊には人物もほとんど登場せず、事件も記述されず、そして特定の年代も歴史と民俗

明記されることは少ない。これが果たして歴史の本だろうか、いぶかる読者がいるのも当然のことである。しかし、今までの歴史の記述について少し批判的に、あるいは反省的に読んでみると、自分たちの歴史とは思えないことがある。市域に住んで生活し生産に従事してきた人々の歩んできた歴史にしては、その日常の暮らしぶりが出てこないのである。私たちが実際に人生をこれまで生きてきて日々行ってきたことが、過去にはどうであったのか、先祖たちはどのようにしていたのかを確認しようとして日本史の本や市史を読んでみても必ずしも教えてくれない事項が多い。歴史の本を読むと、その地域の耕地の面積や種類、そこで作られていた作物、その土地に賦課された年貢や算出されて徴収された税金の額はよくわかるし、年貢や租税を徴収することに関連しての支配機構や行政制度はよくわかる。しかし、その耕地で人々は何のような服装をして、どのような道具を用いて耕作していたのか、そのときの労働時間は何時間ぐらいであったのか、また休日はあったのか等々を知りたいと思っても、なかなか教えてくれないのが従来の歴史の本であった。耕地での生産はそれでもまだ比較的よくわかる事柄である。衣食住とか家族生活あるいは娯楽とか楽しみという、その他の日常生活になると、私たちが今日やっていることの以前の様相はほとんど何もわからないと言ってよい。

歴史の研究をする人の中には、歴史は天下国家にかかわることを明らかにするのであり、つまらない日常茶飯事をあれこれ論じる学問ではないと主張する人もいるが、それでは特定の地域の歴史を明らかにする市史などはまったく

必要ないことになるし、また逆に私たちが日常生活の中から抱く疑問を歴史に問うということもできなくなってしま
う。従来の歴史の記述だけに満足しているわけにはいかないのである。民俗という一巻は、いわゆる歴史が充分に明
らかにしてくれない人々の日常生活の歴史を明らかにする役割を持つ。



1



2

図表1 絵に描かれた民俗
御宿・勝又半次郎のスケッチ画
(1900年頃・勝又重夫氏所蔵)

- 1 田植え
- 2 脱穀

第二節 市史と民俗学

民俗学の成立

日本で民俗学が成立したのはそれほど古いことではない。今から六〇年ほど前に柳田国男（なぎた くにお）という人物が旧来の歴史研究の限界を指摘し、歴史研究を補う新しい学問としての民俗学を提唱した。過去に書き記された文字資料がなければ、現在に以心伝心で伝えられ、人々が実際に行っていることを資料にして研究すればよいではないかという考えに基づき、上の世代から受け継がれて、人々の行為や知識として現代に存在する事象を民俗と名付け、その民俗事象を調査し、それを基礎に研究することで従来は資料がなくて明らかでないことと諦めていた私たちのごく平凡な日常生活の歴史が明らかになるとして、その具体的な成果を次から次へと発表して、注目された。

それから半世紀余りが経過して、民俗学という学問もようやくその意義を認められ、各地の県史や市史の編さんの際にその一巻として加えられることが多くなった。静岡県内の刊行物についてもその傾向は見られる。静岡県史は資料編・民俗に伊豆、駿河、遠江の三巻を設け、さらにそれらを総括して静岡県内の生活文化の歴史を記述する別巻民俗文化史を刊行している。また、他の市町村史でも近年は民俗編を一巻加えることが常識になってきていると言えよう。

第2節 市史と民俗学

民俗学の方法 と地域の歴史

地域の人々が日々暮らしている中で行っていることや暮らしに関する知識が民俗と呼ばれる事象である。それに基づいて歴史を組み立てるのが民俗学である。その場合、民俗学は全国から資料を集



写真1 イボガミサマへの祈願（伊豆島田）

めて、それを類型化し、比較する中で歴史的な過程を再構成するという方法を基本としてきた。遠方で思わぬ一致があれば、その背後に遠い過去が隠されていると考えた。日本列島は一つであり、一つの歴史を形成してきた。だから離れた場所で同じことが行われているのは、共通の過去があり、後にその中間に新しい別の姿が出現したため離れて見られるようになったと考えた。日本の民俗学の開拓者柳田国男が終始強調したのが広域的な比較研究であった。個別の郷土で研究するのではなく、日本全体として研究するのが民俗学であるという通念ができた。そのため、個別の地域の民俗は解釈や位置付けもされずに、全国的な比較研究の資料として提出されることが原則となった。このような民俗事象がここにはあるというこのみを記述することが要求され、調査し記述する人がそれを分析し、意義を考えることは禁止された。

今までの市史に含まれていた民俗の記述も以上のような傾向を示していた。読者としてはそれでも民俗事象の存在を知って興味を抱くこととなり、また自分たちの地域の民俗について認識することになるのであるが、やはり一歩前進して、なぜこのような民俗がこの地域にはあるのか、これと同種の形態の民俗はどのような広がりを見せて分布しているのか、地域の歴史の過程とこのような民俗のありかたはどのように関連するのかという疑問を抱き、考えを深めたいと思うであろうが、それに応えてくれる記述はほとんどなかったと言えることができる。



写真2 須山の祭り

しかし、そのような考え方に対する反省はこの数十年の間に深められた。地域に即して地域の民俗を考察して、位置付けすることが民俗学の一つの立場として認められるようになってきた。地域の歴史的展開の中で民俗を理解し、また地域の民俗によって地域の歴史を描くことが疑問視されることなく行われるようになってきた。県史や市史、町

村史がその構成の一巻として民俗編を設けるようになってきたのもその民俗学の動向を反映していると言ってもよいであろう。地域の民俗で地域の歴史を明らかにするというのは新しい試みであるため、未だその方法は確立しているわけではない。現在は試行錯誤の時期とも言える。裾野市史の一巻としてここに刊行される民俗編も、その試みの一つである。

民俗は人々が両親や祖父母から継承して実際に現在行っていること、知っていることである。それは確かに上の世代から学び、継承してきたものである。過去を現在に伝えていっているものである。しかし、歴史研究の基本資料とされる文書・記録とは大きく異なり、資料として作成された時間は明示されていない。文書・記録は必ず過去の特定の時間を表示している。それを根拠に過去が復元されるのであり、時間の経過の中での変化が示されるのである。歴史の本がほとんど例外なく時間の経過が記述の順序になっているのはそのためである。しかし、多くの民俗の記述ではそのような時間の経過の順に内容が配列されていない。この本でも同様である。それは

個別の民俗事象が特定の時間を明示していないからである。過去のある段階に自分たちの先祖が作り出したり、他所から学んだりして成立した民俗が世代を超えて受け継がれて今日に至っていることは明らかであるが、その成立時期を明確に示すことはほとんどない。現在の民俗にはむしろ、成立形成された当時のまま今日あるのではなく、成立してから今日まで伝承されてきた長い時間の中での度重なる改変、すなわち部分追加や部分消滅を累積している。現行の民俗は歴史の過程を累積して今日まで存続してきたのであり、そこに大きな特色があると言ってもよい。個別の民俗が特定の時間や時代を表示しないのは当然である。したがって、民俗の記述は時間軸で古い時から新しい時へと配列されない。人々の生活の諸側面を把握し、その事象を整理して、分野として記述していくのが一つの常套手段となっている。この一巻もそれを採用している。

民俗という言葉が示す範囲は広い。私たちの日常生活のすべてが含まれると言ってよい。日々の暮らしの単位である家族や地域の組織、あるいは親類のつき合いももちろん民俗である。どのような家に住み、いかなる着物を着て、毎日のような物を食べてきたか。そして、日々の生産活動がある。農業生産の様相、たとえばどのような農具を用いてきたのか、農作業の準備から収穫までの過程にはどのような作業があり、またその間に作業の無事を祈ったり豊作を願ういかなる儀礼があったのかなどは重要な民俗である。民俗といえば各地で行われている珍しい祭礼や行事のことだと思っている人がいるように、一年間の年中行事や神社の祭りが民俗のイメージとなっている。また冠婚葬祭と呼ばれる一生の節々に行われる儀礼も当然のことながら民俗になる。様々な信心や祈願の行為、さらには芸能と呼ばれるものまで含まれる。欧米の民俗学では、民俗といえば、昔話や伝説あるいは民謡のことと考えられているほどに、いわゆる口承文芸は民俗のなかでの比重は大きい。この市史でも、これらの民俗を把握しようとした。

第三節 民俗編の構成

本巻の編成

私たちの裾野市域は南北に黄瀬川が走り、その両側に平地が広がり、東側が箱根、西側が愛鷹と富士の山々がさえぎっている。全体としては北が高く、南へ向って緩やかな傾斜がある地域である。自然としては海と海岸を持たないだけで、その他の人間生活に必要な環境は揃っていると云える。この豊かで変化に富む環境のもとで先祖は田畑を開き、山林を統御し、集落を形成して、日々のさまざまな努力と工夫をして生活を送ってきた。近年までは市域の生活の基本は農業であった。水田稲作、麦を中心にした畑作、あるいは養蚕が久しい間の市域に暮らす人々の生業であった。民俗編はその先祖たちから受け継がれた生活の諸方面をできるだけ詳細に記述し、必要に応じてそれを分析・解釈し、その民俗の意義を説明して、今後の市域の生活を考えていく参考に供しようとするものである。

この巻は全部で五章で構成されている。すなわち、第一章「生活環境の民俗」、第二章「社会と生活」、第三章「時間と生活」、第四章「心意と生活」そして第五章「社会変化と民俗」である。基本的に市域の生活の基盤を最初に明らかにし、そこで展開する生活の仕組みを述べて、次に一年という短い時間から一生という長い時間での人々の生活と生産の様相を示し、その生活の中に点在して置かれている各種の儀礼を眺めて、人々の神社や寺院との関係を明らかにする。そして最後に、近年の急激に変貌する市域の様相と民俗との関連を考えようとした。



写真3 空から見た裾野（裾野市広報広聴課提供）

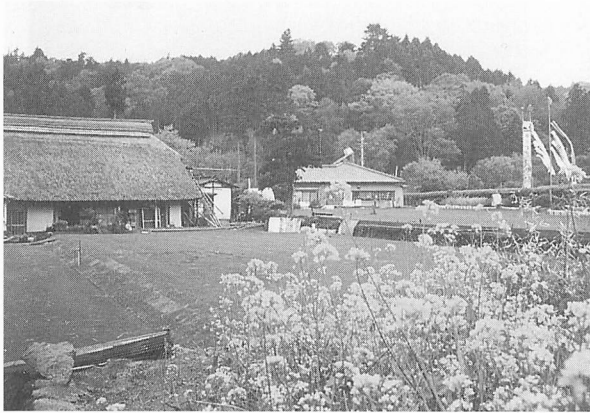


写真4 茅葺きの家（下和田）

市域の民俗の特色

以下では各章の特色と市域の民俗として注目すべき事象をいくつか紹介しておこう。

第一章「生活環境の民俗」で市域に人間が住む前から存在した環境とそれを利用してきた人々の努力の跡を記述する。自然環境に制約されながらも、その環境を利用し、自分たちの生活空間に転化して、安定的な生活を送る努力を重ねてきた。その基礎には自然への理解、認識、知識が集積されている。市域の人々はどのように自然を

認識し、自然に親しみ、そして利用してきたのかを明らかにしようとした。ダタラと呼ばれる溶岩が頭を出している市域では、それに悩まされながら、種々努力を重ねてきたことが民俗として今に伝えられている。富士山の麓の大野原、愛鷹山、箱根山と市域の生活は密接に結びついていた。山なしには生活ができなかったことも民俗を通して明らかになる。そして水不足の地域であった。全国的には箱根用水で有名な深良用水も自然に悩まされつつ、逆に自然を統制し利用した先祖たちの創意工夫の成果である。

第二章の「社会と生活」では、市域で暮らす人々が先祖代々形成してきたさまざまな社会関係や社会組織を取り上げた。社会組織の重要な出発点は家族である。その家族を生活空間としての住居・屋敷との関連で把握し、そこから次第に外に出て、地域の社会組織や社会関係へと及んだ。家族の継承という点では、かつては最初に生まれた子供が男女にか

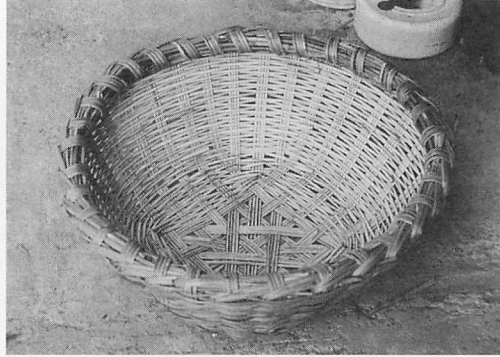


写真5 バイスケ (茶畑)



写真6 ハマオリ (葛山)

が、生産は四季の変化と対応して行われてきたことを示そうとした。その中で今ではほとんど見られなくなった竹で行李やバイスケという製品を盛んに作っていた様相やその生産技術を明らかにしている。いわゆる冠婚葬祭を市域では非常に丁寧に行っていることがわかるが、その中では駿東地方の一つの特色である葬儀当日のハマオリ、三十五日のハマオリが行われていることが注目される。そしてさらに注目されるのがいわゆる位牌分けとオヤネンプツである。オヤネンプツは四十九日までの七日めごとと念仏をするのであるが、それを子供たちが順番に自分の家を会場にして

かわらず家を相続する、いわゆる姉家督とか初生子相続と呼ばれる方式が市域で広く行われていたことが明らかにされている。そして、あちこちで聞くことができるチャーマツナギという方式もそれとの関係で注目すべき民俗である。地域組織としてはモヨリと呼ばれる単位が重要な存在である。さまざまなことがモヨリを単位に行われてきたことを記述した。

第三章「時間と生活」では四季の变化に富む中での生活をまず取り上げる

行う。これは近年山梨県から長野県さらに群馬県におよぶ地域で見られる位牌分けと無関係ではない注目すべき民俗と言えよう。

第四章は「心意と生活」と題した。心意という言葉は日ごろ接することのない単語であり、不可解に思われる人もいるであろう。これは民俗学の開拓者柳田国男が用いた言葉で、人々の観念、意識、感覚を表現するものである。したがって、ここでは他の章が専ら人々の行為として外に表れた事象を取り上げるのに対して、人々の内面にかかわる民俗事象を扱う。その中心が信仰とか信心と呼ばれるものである。市域では熱心に信心が行われてきたが、特に念仏が盛んであった。各ムラでの念仏講とは別に、大念仏講といって広域的に行われてきたことは注目される。同様に幕末に勧請されたヨシダサンが固定した神社を持たずに複数のムラを送られて行く方式でまつられていることも注目される。信仰がムラ内で完結しない伝統があると言えようか。

第五章で「社会変化と民俗」と題するように、近年の市域の急激な変化を取り上げている。農業の変化、住宅地化の進行、都市的生活様式の採用など、伝統的な民俗を改変し、それまでの民俗は衰退したり、消滅したりし、逆に新しい状況が新しい民俗を作り出すという過程が進んでいる。その新しい民俗としては、「すその阿波おどり」が注目されよう。商店街の夏のイベントであるが、それが市域全体の夏の楽しみとして多くの人々を集めている。また新たな住宅団地でもドンドヤキが行われ、新住民の結集、連帯の契機となっている。

民俗は過去の歴史を今に教えてくれる。地域に伝承されている民俗はその地域の歴史を教えてくれる。この一卷は間違いなく裾野市域の歴史を示す本である。しかし、単にそれに止まらない。民俗は美しい過去の記憶ではない。現在生きて暮らしている人々の文化なのであり、未来を指向する人々の生活である。過去を明らかにすると同時に、現

在から将来に向けての市域での暮らしについて示唆を与えてくれるし、また民俗の研究から今後への展望も開くことができる。民俗学は経世済民、すなわち世のため、人のためになる学問として成立した。地域の暮らしの幸福のために民俗の調査研究は行われる。この民俗編は裾野市史の資料編の一卷であるが、単なる研究の素材集ではなく、民俗を通して歴史の過程を明らかにし、現実の市域の生活を解説しようとした。しかも、民俗は固定した存在ではない。

人々の生活の変化に合わせて変化していくものである。今はない過去を懐かしむことができる民俗もあれば、今に生きる先祖たちの努力や工夫を学ぶことができる民俗もある。現代の人びとの地域生活に不可欠な民俗もある。さらに新たに形成された民俗もある。さまざまな民俗をこの一卷の中から読み取れるであろう。